

2021 年度 医療安全セミナー

『医療安全を学び活用する』

公益社団法人 日本放射線技術学会 近畿支部
学術委員会

「安全とは何か？～放射線技師にお伝えしたい医療安全の基礎知識～」

大阪府済生会野江病院 山本 鋭二郎

多くの医療従事者は常に医療が安全に提供されているとは思ってはいないはずである。仮にそうでなければ危うく、まずは「危険」を感じる能力を取り戻すべきである。しかし、「安全」とはいったい何だろうか？どのような状態が安全なのか？実は「安全」を理解している人は少ない。人は環境に適応する能力が高い。この能力は現場を安全にするために必要なものだが、時として不安全な状況に慣れ、患者に不利益をもたらすことに慣れ、自らをごまかすことにも慣れてしまう。それこそが安全とは対極のところにいる。エラーが起きると人は多くの事実を蓋をし、本質的なエラー原因から目を背け、その原因を環境や他者のせいにし、そして改善をあきらめる。これでは安全は生まれない。まずは安全を理解し、客観的に自らと現場を見直すことが必要である。

本講演では診療放射線技師に必要な医療安全の基礎についてお伝えしたい。エラーが生じるメカニズムを理解し、エラーの低減に努めてもらい、より安全な現場づくりを目指す契機となれば幸いである。

「人間工学的アプローチ：作業環境を改善し、医療安全に活かす」

大阪府済生会野江病院 山本 鋭二郎

われわれ放射線技師は医療従事者の中でも多様な装置を扱う職種の一つである。診療の質を向上させ、高い診断能や治療効果を得るために多機能化・高精度化する装置を使いこなさなければならない。多機能化や高精度化は診療の質向上をもたらした反面、作業の複雑化にも繋がるため、作業者の認知負荷を高め、結果的に安全を脅かす。多くの診療装置のユーザーインターフェースは多くの場合、操作する者のことを考えて作られておらず、エラーを誘発する一因になっている。しかし、われわれは使いづらい装置に慣れてしまい、逆に人が装置に合わせるといった間違いを犯し続けてきた。その結果、同じようなエラーがさまざまな施設で頻繁に起きているのが現状である。このような状況は患者の安全を守るためにも、われわれが安心して診療に従事するためにも看過することはできない。

本講演では作業環境などの外的要因によってエラーが生じるメカニズムについて理解を深めていただきたい。そして作業環境から受ける不安全な外的要因を改善し、安全な作業環境を手に入れる

術，すなわち人間工学的アプローチについて知見を述べたい。

「認知心理学的アプローチ：認知・行動の特性を知り，医療安全に活かす」

滋慶医療科学大学大学院 石松 一真

ヒューマンエラーの防止や安全の問題を考えるうえでは，われわれの行動の基盤となる情報処理の特性を踏まえ，“To err is human”の所以を理解することが必要となる。医療場面と日常場面では，作業従事者に求められるスキル，作業の内容や環境などに違いはあるものの，失敗の背景要因のひとつである人間側の要因（ヒューマンファクター）には共通点も多い。

本講演では，まず，“注意”の機能と人間の思考の癖（バイアス）に焦点をあて，思い込みや不注意が生じるメカニズムについて考える。また，安全の問題を考える上で重要な役割を担っている“注意”の機能を，われわれはどのように理解しているのかを考える。次に，ヒューマンエラーの問題にチームとして多角的に取り組むために重要となるコミュニケーションの問題を取り上げ，コミュニケーションの齟齬が生じる背景要因を考える。

本講演が，認知・行動の特性の理解とともに，日々現場で経験する事象を情報処理の観点から捉えなおすきっかけとなることを期待する。また人間の認知・行動の特性に関する知識が，「失敗を防ぐ」ことはもとより，「成功を増やす」ための一助となれば幸いである。

「安全性を高めるための事例分析手法」

京都府立医科大学附属病院 太田 誠一

医療事故の80%以上が人的要因に起因するという調査結果がある。生理学的，認知的，社会心理学的特性などにより，人は誰でも間違える。インシデント発生を減らすアプローチは，主に，推定要因をふくめたリスク分析を行い，事前に対策を検討するアプローチと，実際に発生した事例を分析し，対策を行うことで将来のリスクを軽減するアプローチがある。本講演では，JAXA ヒューマンファクタ分析ハンドブックや London protocol を参考に，後者の手法を中心に述べる。London protocol では，単に根本原因を分析するだけでなく，より安全性の高い医療システムの実現を目指すために，未来指向の建設的なシステム分析の視点に立つ必要があると述べられている。人もシステムの一部という観点に立ち，失敗の頻度を減らし，検出能をあげ，影響を最小化することで，将来にわたり安全な医療を目指す必要がある。施設により対応が異なることが予想されるが，概念的な理解につながればと考える。